

病害虫発生予察情報予報第 5 号 (9 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (早植え)	トビイロウンカ	多	多	152~154	 斑点米カメムシ類
	紋枯病	やや多	並	143~144	
	斑点米カメムシ類	多	多	161~162 180~183	
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	多	多	152~154	 トビイロウンカ
	穂いもち	並	並	137~142	
	紋枯病	やや多	並	143~144	
	斑点米カメムシ類	多	多	161~162 180~183	
	コブノメイガ	多	多	159~160	
	白葉枯病	並	並	148~149	
<p>1. トビイロウンカ (早植え及び普通期水稲) 本年は、発生株率が平年より高く、一部圃場では発生が急激に増加しており、今後減収等の被害を生じる恐れが高まっている (8 月 20 日付け病害虫発生予察警報第 1 号参照)。ただし、地域、防除歴の違い等によって、発生量は大きく異なるため、発生予測図 (共通図 1) を参考に、必ず圃場での発生状況を確認したうえで、本虫の幼虫ふ化揃い期に薬剤防除を実施する。</p> <p>2. コブノメイガ 本年は、食害株率が平年より高い。止葉を含む上位 3 葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の 7 日後 (幼虫ふ化揃い期) に薬剤防除を実施する (7 月 22 日付病害虫発生予察注意報第 3 号参照)。</p> <p>3. 斑点米カメムシ類 発生が多くなると予想される。ただし、発生状況は地域ごとに異なるため、見取り調査等を行い、発生状況に応じて防除対策を徹底する。</p> <p>4. いもち病 一部で葉いもちの発生が多い圃場がみられる。葉いもちの発生が確認される圃場では、穂ばらみ期～出穂期の薬剤防除を徹底する。穂いもちの発生が多くなると予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。</p>					
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	多	200~201 207~209	 ハスモンヨトウ
	カメムシ類	やや多	やや多	201~202 209~210	
	紫斑病	並	並	195~196	
<p>1. ハスモンヨトウ 本年は気温が高く推移しており、今後発生が増加する恐れがある。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。また、その後も圃場での発生状況に注意し、新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。</p>					
全般 普通作	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	多	多	211~212	 ハダニ類
	うどんこ病	並	並	201~203	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	並	205~209	
	アブラムシ類	並	並	216~217	
	<p>1. ハダニ類 発生が平年に比べやや多くなっている。本圃へハダニ類を持ち込まないように、定植前に防除を徹底する。</p> <p>2. 苗立枯症(炭疽病、疫病、萎黄病) ランナー切り離し後の親株は早期に処分する。併せて、発病株の発生を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。薬剤防除は、病原菌感染後の散布では防除効果が劣るため、週間天気予報に注意し降雨前に行う。ビニル雨よけ被覆育苗圃場では、有効薬剤を約10日間隔で定期的に散布する。ただし、既に発病がみられる圃場や雨よけ被覆を行っていない圃場では、散布間隔を短縮する。(詳細は8月18日付病害虫対策資料第6号参照)。</p>				
アスパラガス	茎枯病	やや少	並	309~310	 褐斑病
	褐斑病	多	多	311	
	斑点病	やや少	並	310~311	
	アザミウマ類	やや多	やや多	313~314	
	ハダニ類	並	並	314~315	
<p>1. 褐斑病 発生が平年に比べ多くなっている。降雨時以外は施設開口部を開放し通風を図るとともに、計画的な薬剤防除を的確に実施する。</p> <p>2. ハダニ類 多発生すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。虫見板への払い落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。</p>					
タマネギ	<p>1. べと病、乾腐病 べと病菌の苗への感染を防ぐため、育苗圃のバスアミドによる土壌消毒を確実に(令和2年8月7日付け病害虫対策資料第4号参照)。また、乾腐病菌は、育苗トレイに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、前年に使用したトレイは使用前に洗浄し資材消毒剤による消毒を行う。</p>				
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ)	やや多	やや多	163~165 イチゴ: 214~216 アスパラガス: 313, 316 苜: 385~386	 ハスモンヨトウ

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	やや多	239~242	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 発生量や飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合は、早急に防除を行う。(令和2年7月30日付け病虫害対策資料第3号参照)。</p> <p>2. 夜蛾類 夜温が高くなると夜蛾類の活動が活発になるため、果実の被害に注意する。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるため除去する。忌避灯を設置している園では、点灯時間を日没、日の出の時刻に合わせてるとともに、確実に点灯していることを確認する。</p>				
カンキツ	かいよう病	並	並	213~215	 黒点病
	黒点病	並	並	211~213	
	ミカンハダニ	並	少	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	229~233	
	<p>1. 果実腐敗対策 収穫時には果実に傷をつけないよう丁寧に扱うとともに、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。果実腐敗防止対策のための薬剤散布は、収穫7~10日前に薬液が霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。なお、薬剤散布後に100mm以上の降雨があった場合には再散布を行う。</p> <p>2. アザミウマ類 チャノキイロアザミウマによる果実への被害を防ぐために、8月中旬~9月上旬頃の防除を徹底する。特に、高温乾燥が続くとハナアザミウマ類が多発することがあるため、果実の着色始期以降、園内をよく観察し、果実での寄生または被害を確認したら、早急に薬剤を散布する。</p> <p>3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。</p>				
ナシ	黒星病	並	やや多	279~282	 ハダニ類
	ナシヒメシクイ	並	並	293~296	
	ハダニ類	並	並	298~301	
<p>1. 収穫後の防除 チュウゴクナシキジラミ、ハダニ類が多発生すると早期落葉につながるため、収穫後も圃場を観察し、これらの発生が確認される場合は防除を行う。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。</p>					
ブドウ	べと病	やや多	やや多	330~332	
	褐斑病	並	やや多	332~333	
<p>1. 収穫後の防除 べと病等の発生が確認されているため、病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	並	418~419	 輪斑病 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	少	並	425~426	
	チャノキヒロアザミウマ	多	やや少	424~425	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423~424	
	チャノコカクモンハマキ	多	多	422~423	
	チャノホソガ	やや少	並	421	
	炭疽病	多	多	413~414	
	輪斑病	多	多	414	
	1. 炭疽病	一部圃場で発生が多い。秋芽生育中の園では、降雨が多いと秋芽でも多発する。発生園では、秋芽の充実と翌年の菌密度を抑えるため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。			
2. 輪斑病	本病は、高温期に発生が多く、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。				
3. カンザワハダニ	秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに薬剤防除を実施する。				
4. チャノコカクモンハマキ	9月中～下旬頃が重点防除時期である。葉がつづられると防除効果があがりにくいいため、発蛾最盛期から7～10日後に防除を行う。				
5. チャトゲコナジラミ	多発した茶園では、葉裏に薬剤が付着しやすいように、裾刈り等を行った後防除を行う。成虫期防除は効果が劣るため、園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。				

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平成（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 9 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 2 年 8 月 20 日）を基に、「気温：平成より高い」、「降水量：平成並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 9 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平成比）
	低い(少ない)	平成並 (佐賀市の平成値)	高い(多い)	
気温	10	20 (24.2℃)	70	高
降水量	30	30 (180 mm)	40	並

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

定期調査：12圃場
調査日：8月17日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（早植え水稻）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率 52.7%（平年 4.0%、前年 16.0%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

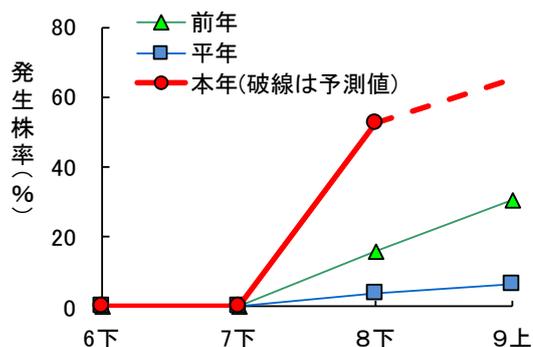


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率0.7%（平年 0.8%、前年 0.5%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

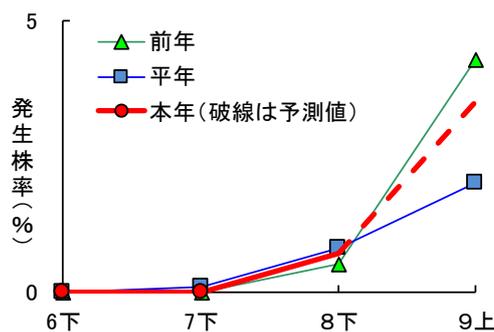


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等)

水稻（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：8月17日～19日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生状況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率 14.1%（平年 3.8%、前年 7.4%）
平年比：多<+> 前年比：多<+>
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件<+>
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件<+>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

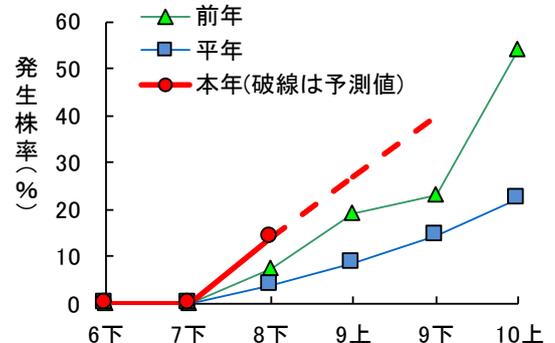


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）【葉いもち】
発生株率 7.8%（平年 13.3%、前年 11.1%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、降水量は平年並で並発生の条件<±>
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、降水量は平年並で並発生の条件<±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

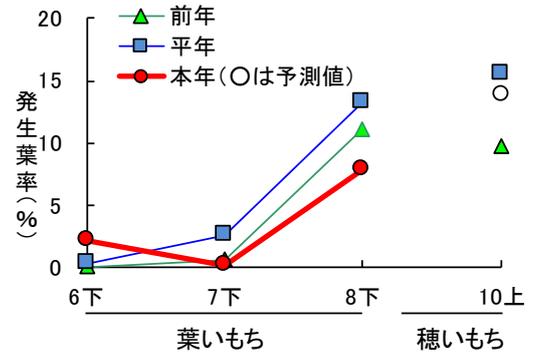


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率 1.7%（平年 2.6%、前年 2.3%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>
 - ② イネの生育状況（中晩生品種（さがびより、もち品種））
茎数 平年比：やや少～並<±>
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件<+>
- 3) 防除上注意すべき事項
各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

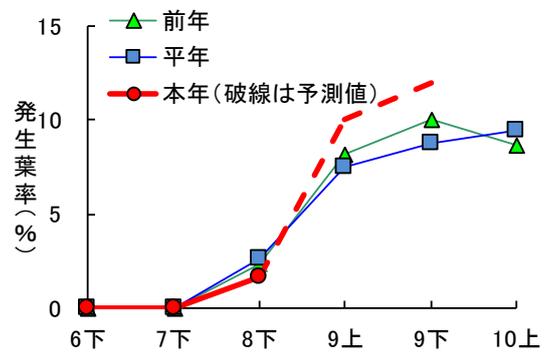


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数（表1）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、発生状況を確認する。穂揃い期の20回すくい取りでクモヘリカメムシが5頭以上認められた場合は直ちに薬剤防除を実施する。

(2) 多発生時は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。それ以外は、乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。

(3) その他については特記事項参照。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2020年8月17～19日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホリハリカメムシ		シロホシカメムシ類		アカシジカシカメ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市西与賀	空地	イノコクサ類	0	2	1	0	0	0	2	5	0
佐賀市北川副	道端	イノコクサ類	1	36	0	1	2	1	1	3	0
佐賀市東与賀	道端	イノコクサ類	0	7	1	2	0	0	4	2	0
伊万里市二里町	道端	イノコクサ類	1	0	1	1	0	2	74	57	0
武雄市武内町	道端	イノコクサ類	0	3	1	3	1	0	6	15	0
唐津市半田	道端	イノコクサ類	0	1	0	0	0	0	0	0	0
神崎市横武	空地	ヒエ、イノコクサ	25	62	6	2	0	0	88	38	0
白石町新明	道端	イノコクサ類	0	8	2	14	0	5	17	36	0
本年（平均）			3.4	14.9	1.5	2.9	0.4	1.0	24.0	19.5	0.0
前年（平均）			1.7	8.1	1.3	0.3	0.3	0.2	1.6	0.4	0.0
平年（過去10年の平均）			2.4	4.7	2.3	0.7	0.7	0.9	9.5	3.2	0.03

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

食害株率 38.0%（平年7.8%、前年2.8%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

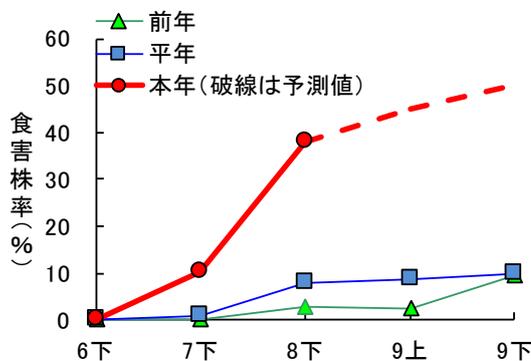


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第6版、2020年8月19日作成)

1. 6月10~15日(図では6月11日)、6月25~28日(図では6月27日)、7月6~11日頃(図では7月7日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(第5版では8月12日以降は平年値、第6版では8月19日以降は平年値)を基に作成した。その結果、第6版と第5版の各飛来虫のその後の予測発生時期は、変わらなかった。

2. 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なる。

3. 田植え時期、品種、地域及びこれまでの防除の違い等によって、本種の発生量は異なる。また、これらの田植え時期等によって、各飛来波に対する防除の重要度も異なるので、各圃場の発生状況を確認し、適期防除を実施する。

4. 今後の飛来状況、気象経過に応じて本図は随時更新する。最新情報は農業技術防除センターのホームページを確認する。

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：8月17～19日



定期調査圃場の様子

1. ハスモンヨトウ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 2.1%（平年 1.5%、前年 0.3%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

白変葉発生株率 2.9%（平年 0.7%、前年 0.1%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

②トラップ調査（図2参照）【県内8地点】

平年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

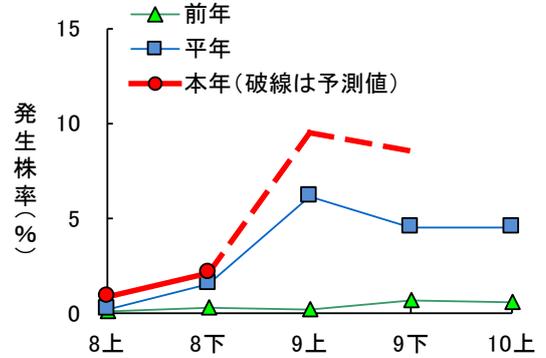


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。

(2) その他については、特記事項参照。

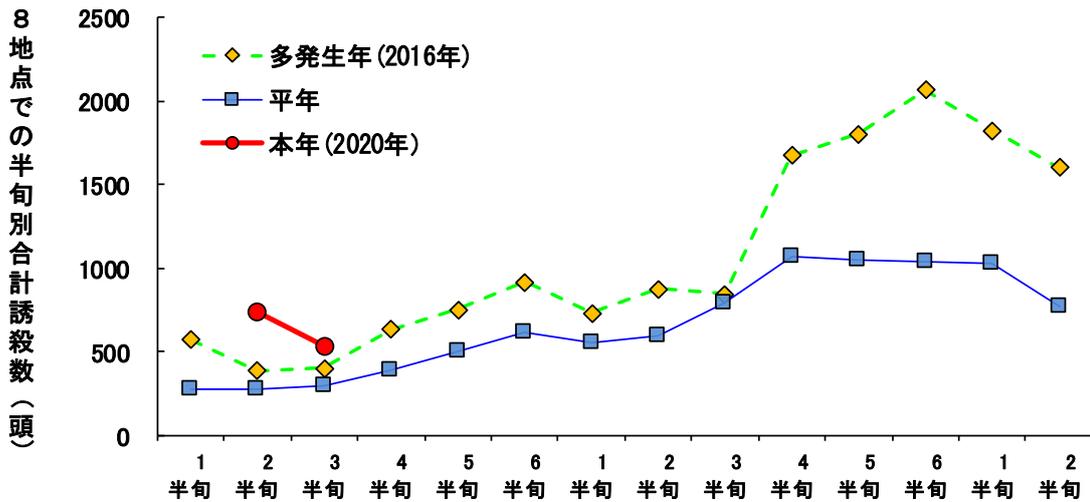


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センターによる県内8地点の平均誘殺数。）

2. カメムシ類

（アオカメムシ、イモンジカメムシ、ホリカメムシ、ミミアカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年 0.01%、前年 0.09%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

②9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

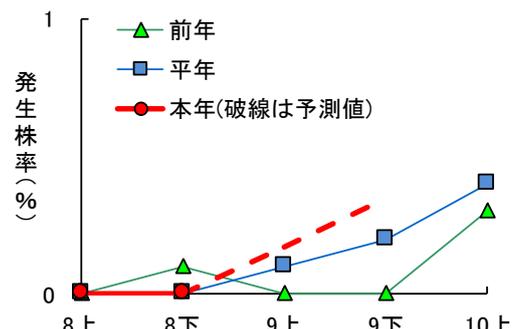


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除は、莢の伸長初期～子実肥大中期（9月中旬頃まで）が効果的である。
- (2) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

3. 紫斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 9月の気象予報 降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 若莢期～子実肥大中期に薬剤防除を実施する。

イチゴ（育苗圃）

（定期調査10圃場）
調査日：8月17～19日



定期調査圃場の様子

【概要に戻る】

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：14.8%（平年10.6%、前年19.2%）

平年比：やや多〈±～+〉

前年比：やや少〈-～±〉

(2) 9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
- (2) その他については、特記事項を参照。

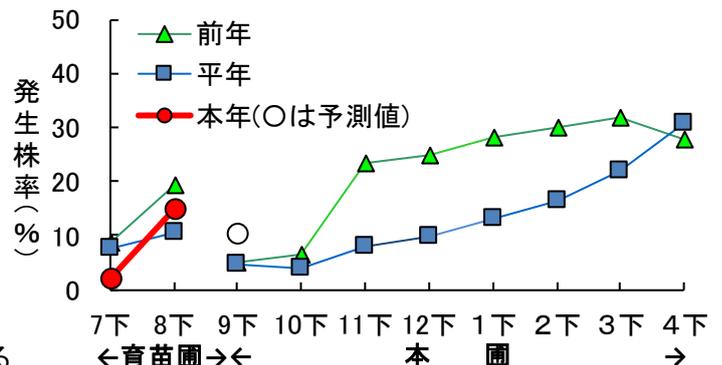


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年2.9%、前年0.4%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。

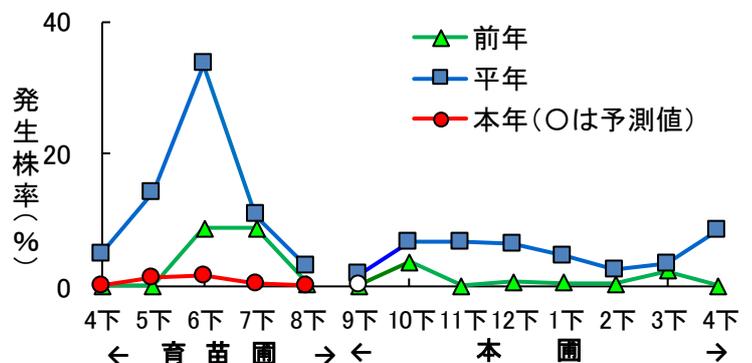


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

アスパラガス

定期調査：7 圃場
調査日：8月17～19日



定期調査圃場の様子

1. 褐斑病

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：50.7%（平年11.6%、前年13.1%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

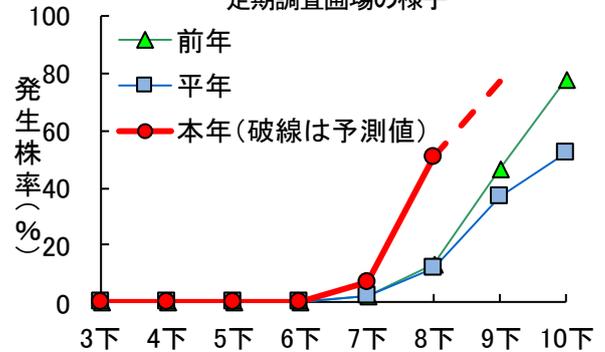


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：20.7%（平年24.9%、前年24.4%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若茎及び親茎への本虫による被害を防ぐため、虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2～3回叩く）により調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。

(2) 多発生圃場では、約7日間隔で2～3回薬剤防除を行う。

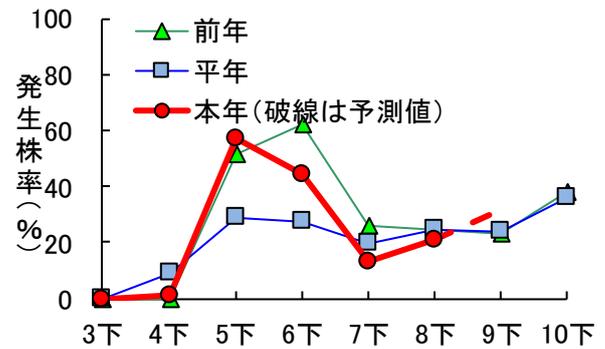


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

野菜・花き共通

【概要に戻る】

1. チョウ目害虫（ハモンヨウ、材バコガ、シイマイヨウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

イチゴにおける食害株率：2.0%（平年0.3%、前年0%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

アスパラガスにおける食害株率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

②フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年よりやや少ない（図3, 4）。

〈-~±〉

③フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺数は、平年並（図5）。

〈±〉

④フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年よりやや多い（大豆の項参照）。

(2)9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。

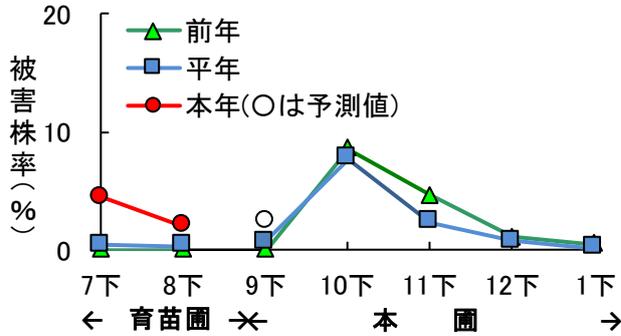


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

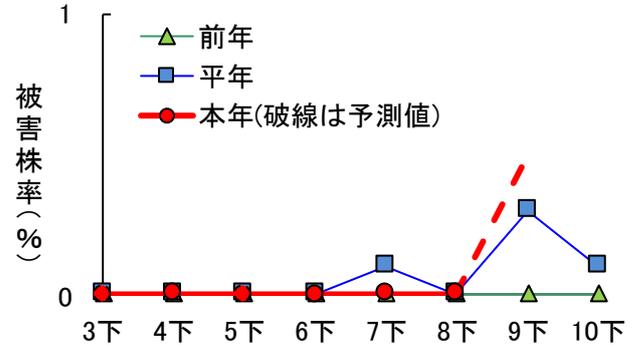


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

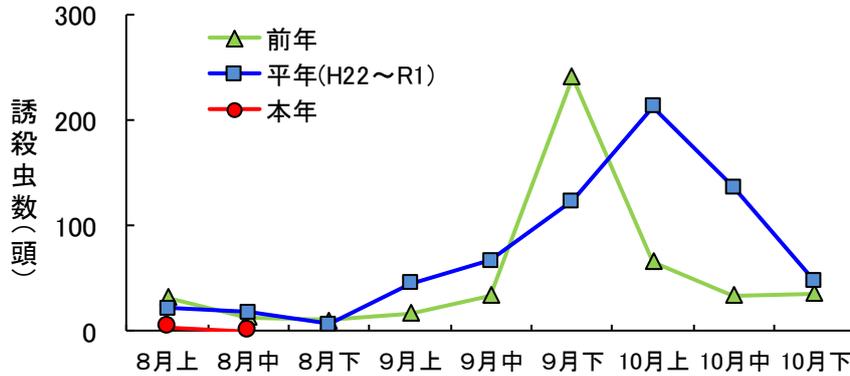


図3 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数の推移
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

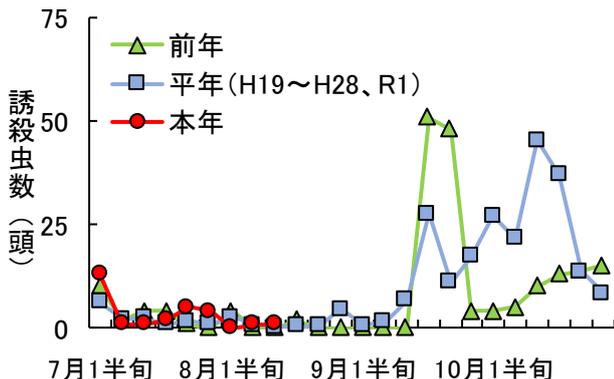


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

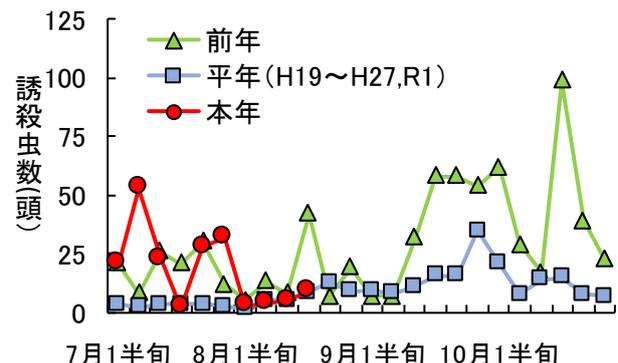


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 予察灯（図1参照）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

② フェロモントラップ（図2参照）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1参照、8月19～21日調査）

成幼虫数平均：15.7頭（平年13.8頭、前年12.5頭）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数（図4、表1参照、8月19～21日調査）

口針鞘数平均：19.1本/果（平年12.7本、前年13.0本）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(4) 9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

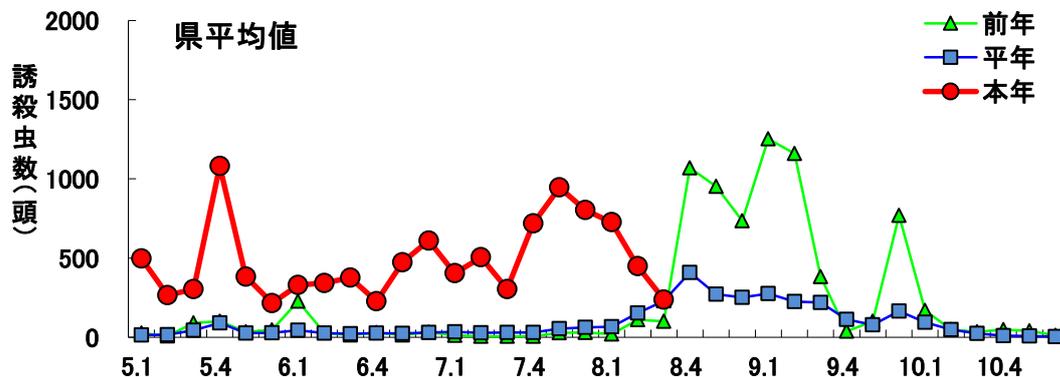


図1 予察灯（佐賀市、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

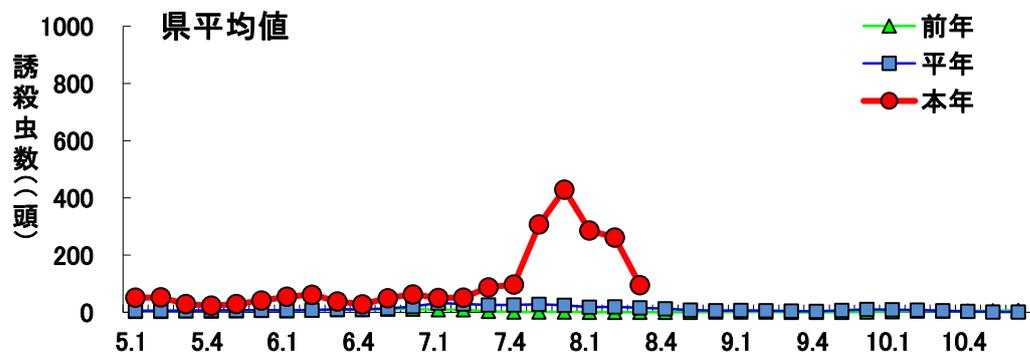


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

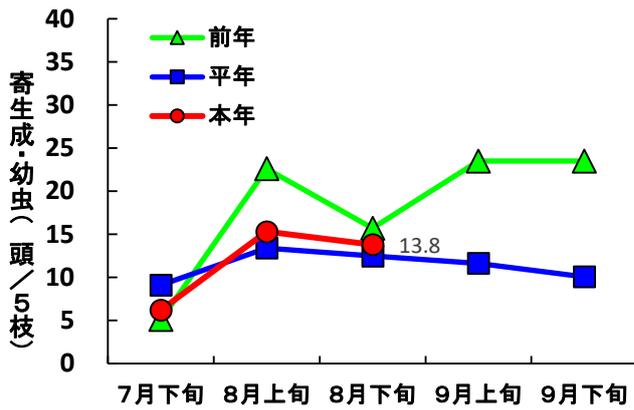


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移(図中の8月下旬の数値は本年値)

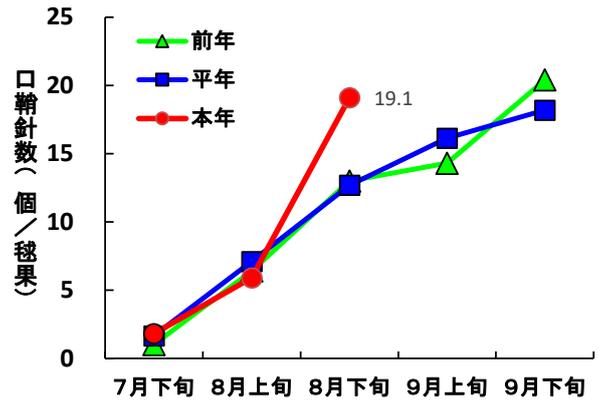


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移(図中の8月下旬の数値は本年値)

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数(図3,4に関する地点別の状況)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾						ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾	
		8月上旬			8月下旬				8月上旬	8月下旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計			
1	小 城 市	1	4	5	0	3	3	極少	7.4	24.8
2	唐 津 市 1	5	6	11	1	5	6	少	10.9	28.4
3	唐 津 市 2	11	14	25	8	10	18	やや少	4.5	18.4
4	伊 万 里 市 1	3	8	11	7	4	11	極少	2.2	16.7
5	伊 万 里 市 2	24	2	26	29	22	51	やや少	7.6	6.2
6	白 石 町	0	24	24	0	16	16	中	4.8	24.0
7	鹿 島 市 1	0	10	10	2	1	3	やや少	8.4	17.7
8	鹿 島 市 2	4	21	25	1	6	7	やや少	3.8	17.7
9	太 良 町 1	1	6	7	1	10	11	少	3.5	16.4
10	太 良 町 2	2	7	9	1	11	12	中	6.3	20.5
	平 均	5.1	10.2	15.3	5.0	8.8	13.8	少	5.9	19.1
	平年	-	-	13.4	-	-	12.5	-	7.2	12.7
	前年(R1年)	7.6	15.0	22.6	10.2	5.5	15.7	やや多	6.4	13.0

1)たつき落としによる調査

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

3)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地形等により差が大きいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：8 月 19～21 日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

発生果率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

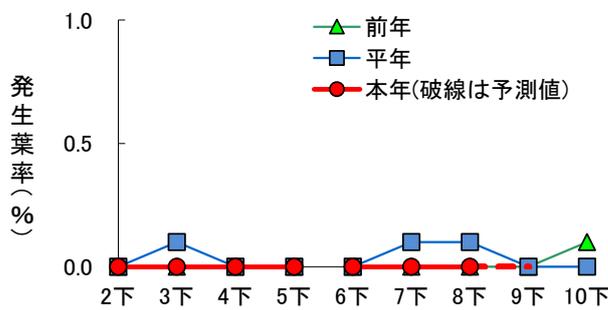


図 1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

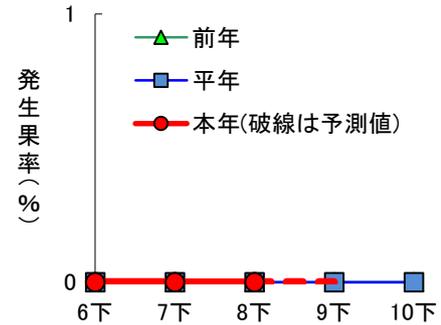


図 2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

(2) 9 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生が問題となる園では、無機銅水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

(2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

(3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は、行わない。

(4) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前～前日までに必ず銅水和剤による防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生果率：9.8%（平年 12.6%、前年 1.4%）

平年比：並<±> 前年比：やや多<±～+>

(2) 9 月の気象予報

降水量は平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が 200～250mm に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の散布を行う。

(2) ‘せとが’ は黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量 150mm を次回散布の目安とする。

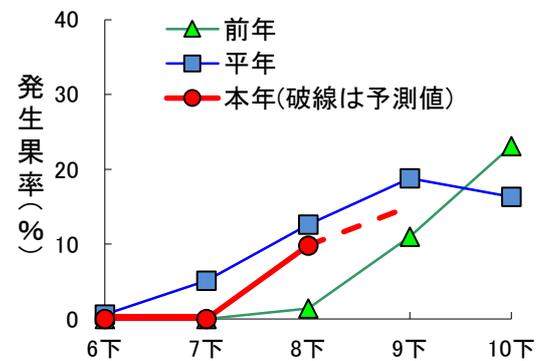


図 1 カンキツ黒点病の発生推移

- (3) 枯れ枝、剪定枝、切り株は伝染源となるので除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、ビニルの袋などで被覆して病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。
- (4) 収穫時期が近づいている品種については、特に、農薬の使用時期（収穫前使用日数）等に注意する。
- (5) その他については、特記事項を参照する。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0.0%（平年4.7%、前年0.1%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

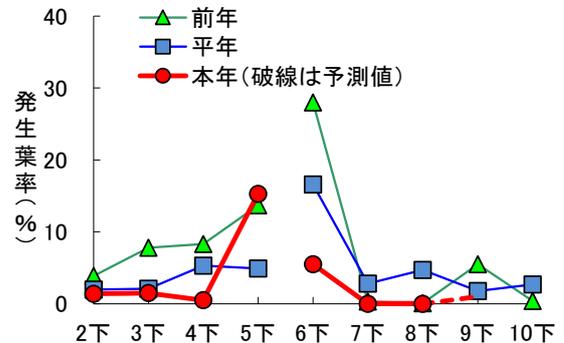


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

定期調査：6圃場
調査日：8月21日

1. ナシヒメシクイ

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① ナシ園地に設置したフェロモントラップ（図1参照）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

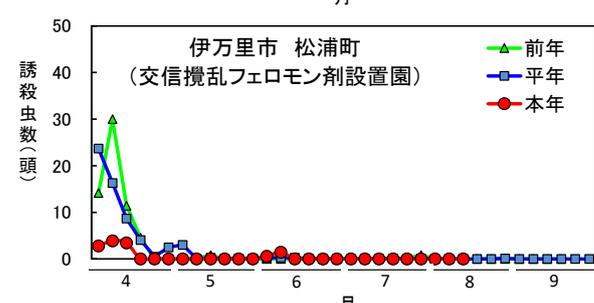
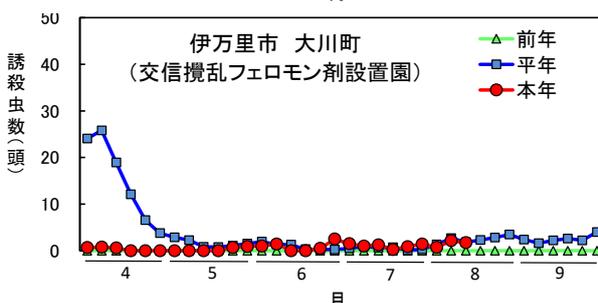
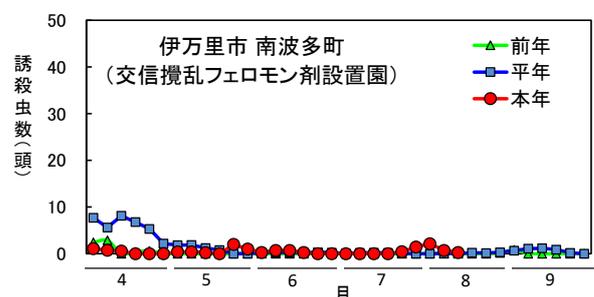
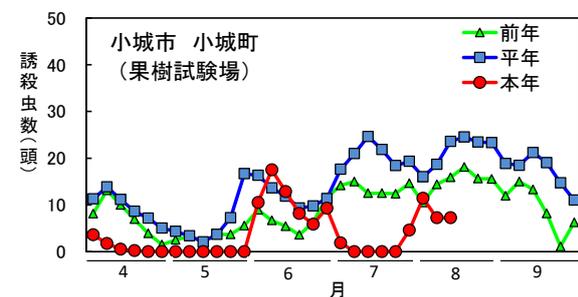


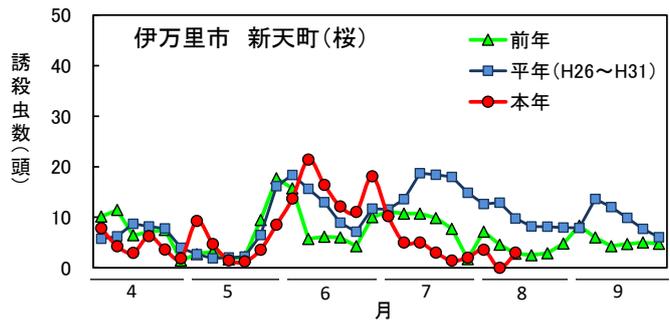
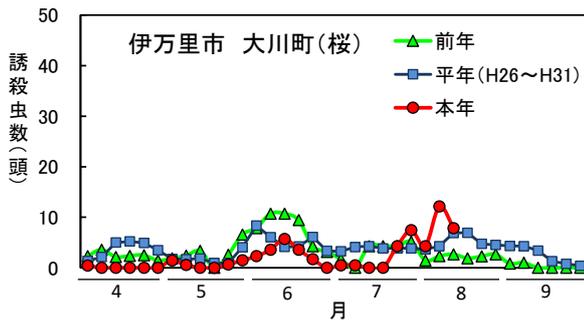
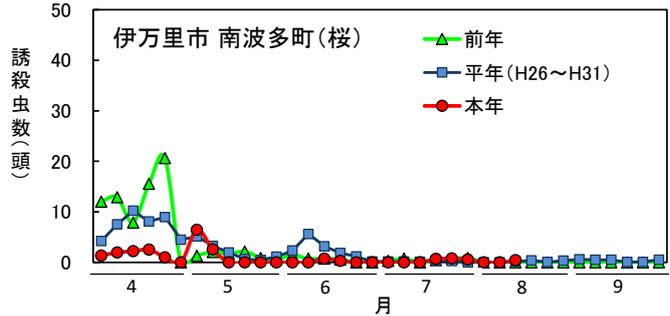
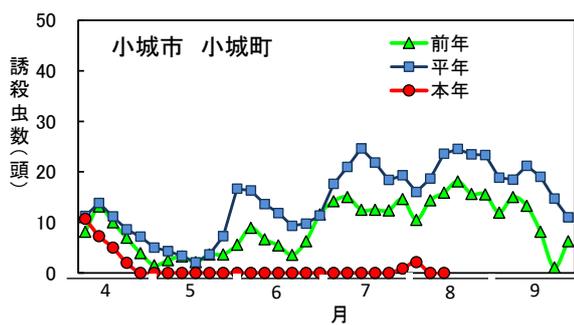
図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

②サクラに設置したフェロモントラップ（表1参照）

伊万里市3ヶ所での8月第1半旬から第4半旬までの誘殺数は、過去3年間の値と比較して中程度である（±）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数（頭）
（西松浦農業改良普及センター調査）※8月1～4半旬の合計値

地点名	H29年	H30年	R1年	R2年
伊万里市 南波多町	0	1	0	1
伊万里市 大川町	8	13	8	30
伊万里市 新天町	40	72	17	12
計	48	86	25	43



(2)9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1)有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2)使用する薬剤の選定（収穫前日数や汚れ）には十分注意し、収穫まで7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (3)交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0.2%（平年8.4%、前年4.2%）

平年比：やや少（～±） 前年比：並（±）

(2)9月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

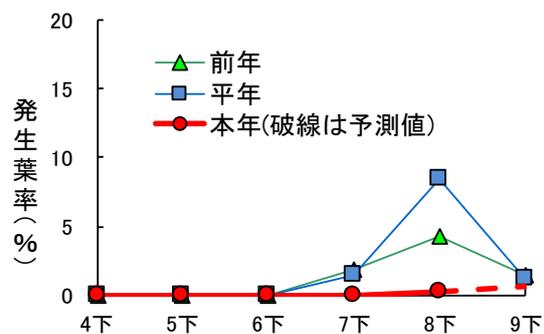


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

- (1) ハダニ類は高温乾燥で急増するため、低密度時（寄生葉率 10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については特記事項を参照する。

ブドウ

定期調査：6圃場
調査日：8月19~21日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：8.2%（平年3.0%、前年2.3%）
平年比：多く（+） 前年比：多く（+）

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は降雨により伝染するので、降雨前の予防散布を徹底する。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

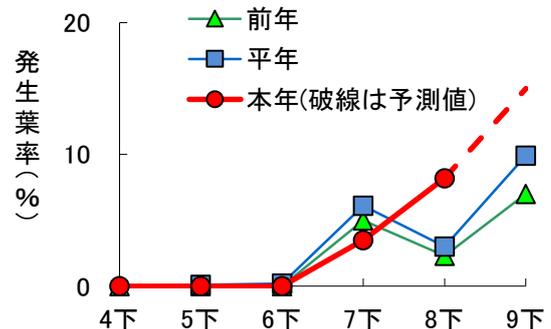


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

定期調査：7圃場
調査日：8月19~20日



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：1.4%（平年2.9%、前年3.9%）
平年比：やや少（-~±） 前年比：やや少（-~±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

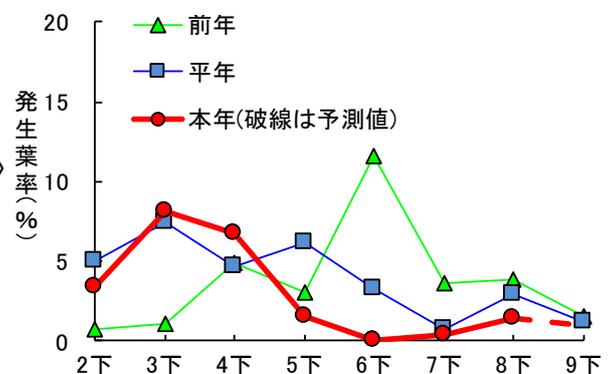


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1は雄繭の発生推移）

寄生株率（雄繭）：2.6%（平年14.2%、前年1.0%）

平年比：少く（-） 前年比：並く（±）

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除適期は第三世代幼虫ふ化期の9月中下旬頃である。

園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期に薬剤防除を実施する。

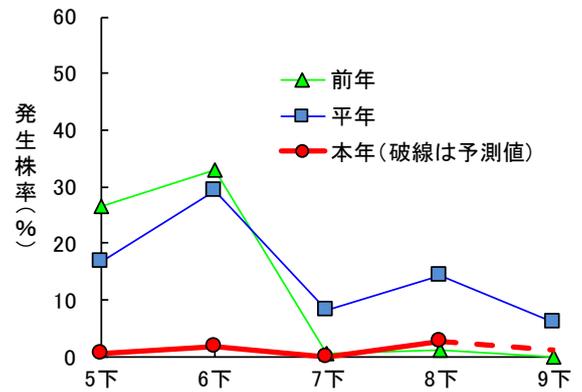


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：21.3頭（平年33.4頭、前年21.7頭）

平年比：並く（±） 前年比：並く（±）

② 吸引粘着トラップ（図2参照）

平年比：多く（+） 前年比：多く（+）

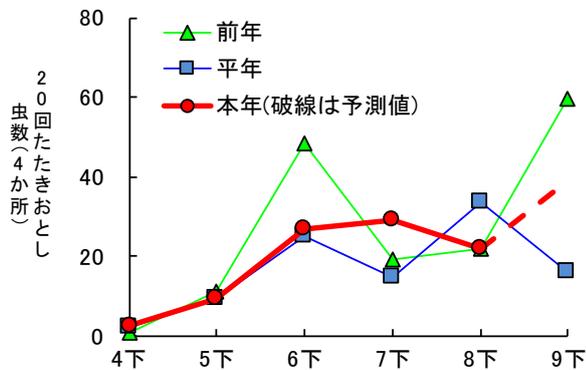


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の被害を抑えるため、発生園では薬剤防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

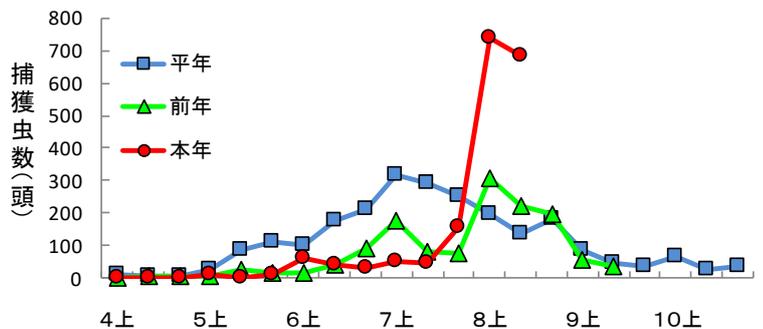


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：1.3頭（平年3.1頭、前年1.0頭）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) チャノキイロアザミウマの項と同じ。

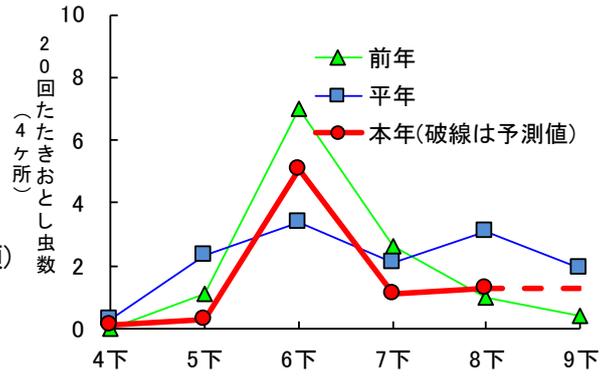


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

被害葉数：8.7枚/m²（平年0.4枚、前年0.1枚）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

②フェロモントラップ（7月下旬～8月上旬の誘殺数 図2、3参照）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：やや少（-〜±）

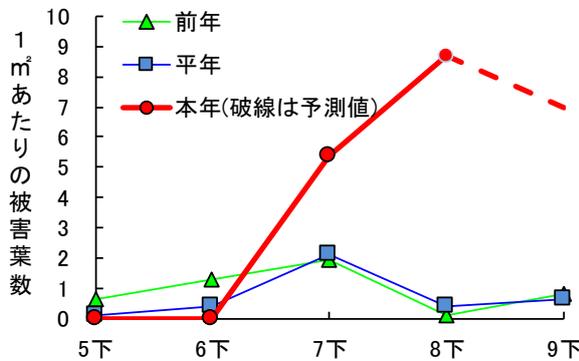


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の発生推移

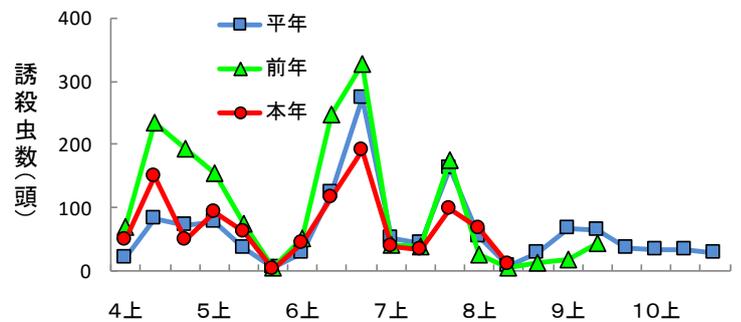


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

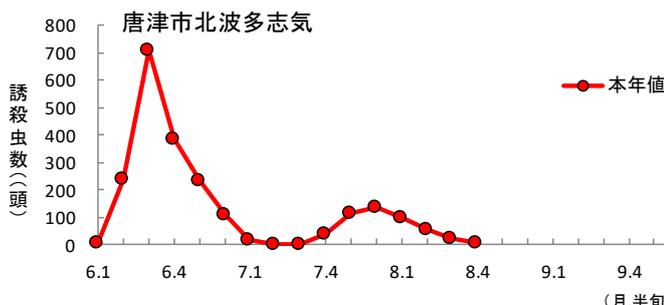


図3 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの半旬別誘殺数推移（唐津市・嬉野市、防除員調査）

※ 唐津市は、設置場所等を変更しているため、本年値のみ表示。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

6. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照、H30より5月調査追加）

発生葉数：12.7枚/m²（平年4.3枚、前年3.9枚）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

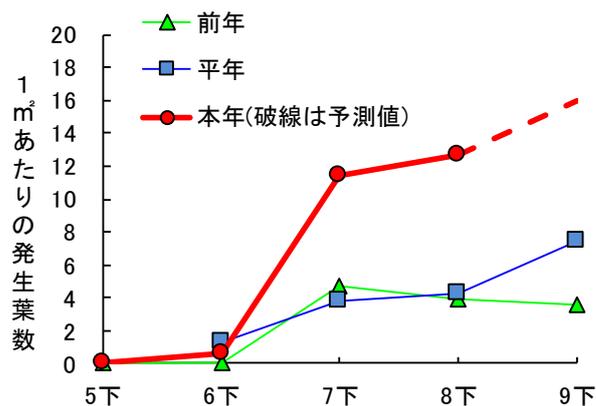


図1 炭疽病の発生葉数の推移

7. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：3.0枚/m²（平年0.8枚、前年1.0枚）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

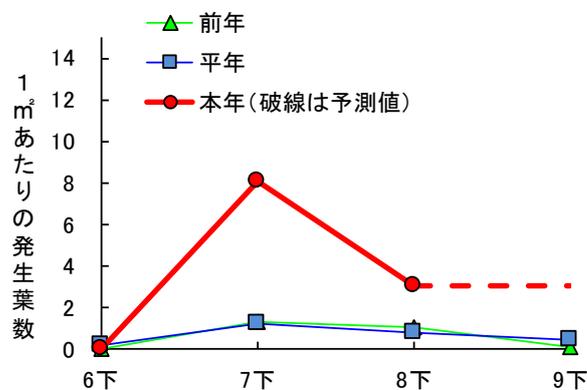


図1 輪斑病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
 〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
 TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085
 Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp